

術後肺転移の自然消失を認めた腎細胞癌の1例

兵庫医科大学泌尿器科学教室 (主任: 生駒文彦教授)

小池 宏, 善本 哲郎, 滝内 秀和, 井原 英有
有馬 正明, 森 義則, 生駒 文彦

A CASE OF SPONTANEOUS DISAPPEARANCE OF PULMONARY METASTASIS OF RENAL CELL CARCINOMA FOLLOWING NEPHRECTOMY

Hiroshi Koike, Tetsuro Yoshimoto, Hidekazu Takiuchi,
Hideari Ihara, Masaaki Arima, Yoshinori Mori
and Fumihiko Ikoma

From the Department of Urology, Hyogo College of Medicine

A 76-year-old man was admitted to our hospital on October 3, 1988 complaining of general fatigue and left flank pain. A large movable mass was palpable in his left flank. Intravenous pyelography and computerized tomography confirmed left renal tumor. Chest X-rays showed a coin lesion in the left lung. Left nephrectomy was performed on October 14, 1988. Histopathological diagnosis was adenocarcinoma of clear cell type. Chest X-rays, on the post-operative eleventh day, showed disappearance of the pulmonary coin lesion which was seen pre-operatively. Recurrence of pulmonary metastasis has not been seen for 14 months after operation. (Acta Urol. Jpn. 36: 1443-1446, 1990)

Key words: Renal cell carcinoma, Pulmonary metastasis, Spontaneous disappearance

緒 言

癌の自然退縮はきわめて稀であるが、われわれは、肺転移巣が術後に退縮した腎細胞癌の1例を経験したので報告し、若干の文献的考察を加えた。

症 例

症例: 76歳, 男性, 会社役員
初診: 1988年9月10日
主訴: 全身倦怠感, 左側腹部痛
既往歴: 26歳, 胸骨・肋骨カリエス
70歳, S状結腸癌
家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1981年に一過性の無症候性肉眼的血尿に気付いたが放置。1984年からときどき左側腹部の鈍痛と圧迫感を自覚していたが放置。1988年7月頃から全身倦怠感と左側腹部痛が徐々に増強してきたため、9月に近医を受診し、IVP・CTを行ったところ、左腎腫瘍を疑われた。9月10日に当科を初診し、10月3日に入院した。

入院時現症: 身長 164 cm, 体重 68 kg, 体温 36.3 °C, 血圧 140/68 mmHg. 栄養状態は良好。前胸部に 6×4 cm と 3×3 cm の隆起性皮膚病変を認め、左季肋部には可動性のある腫瘍を触知したが圧痛はなかった。表在性リンパ節は触知しなかった。

入院時検査成績: 血液一般検査; 異常なし。ESR 38 mm/hr. 血液生化学検査; α₁-globulin 4.7%, α₂-globulin 11.4%, CRP 2.2 mg/dl, LDH 317 U, ALP 2.42 BLU, BUN 13.1 mg/dl, creatinine 1.08 mg/dl, fibrinogen 356 mg/dl, CEA 2.0 ng/dl, AFP <3 ng/ml, ferritin 72 ng/dl 尿沈渣; RBC 2~3/数視野, WBC 1~2/数視野, 扁平上皮 1~2/数視野。^{99m}Tc-MDP 骨シンチグラフィ; 異常集積像なし。

X線学的検査: KUB では左腎部に石灰化を認め、IVP では左腎盂の変形・圧排像を認めた。腹部 CT では左腎中央部に大きな腫瘍を認め、内部には一部に石灰化を認めた。腎周囲脂肪組織はやや不鮮明化していたが、Gerota 筋膜の肥厚はなく腎静脈腫瘍血栓やリンパ節の腫大はなかった。また右腎や肝などには異常はなかった (Fig. 1)。腹部大動脈造影では、動脈相

においては左腎に hypervascularity を認め、腫瘍は左下副腎動脈と被膜動脈からも blood supply をうけていた。ネフログラム相では 8×9 cm の tumor stain

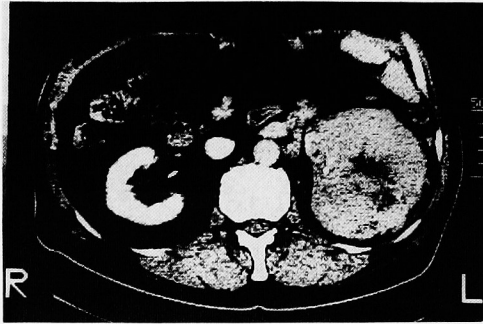


Fig. 1. Abdominal CT scan shows mass with calcification and necrosis in the left kidney.

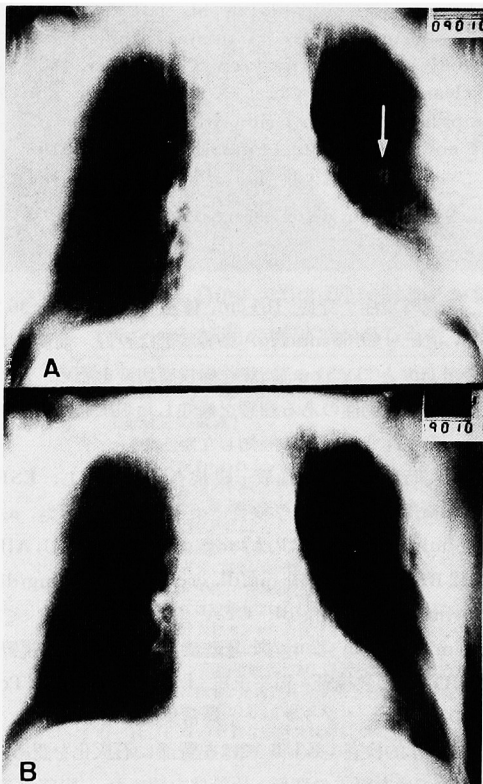


Fig. 2A. Preoperative chest X-rays shows a coin lesion in the left lung which seems to be a metastasis arising from left renal tumor.

2B. Postoperative chest X-rays shows spontaneous regression of the pulmonary metastasis.

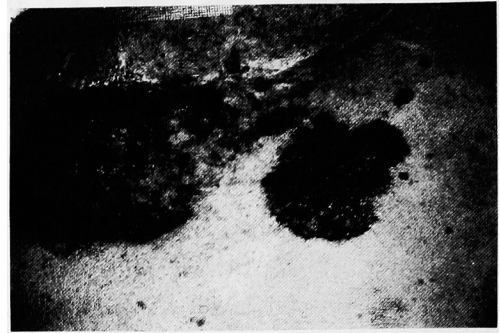


Fig. 3. Gross appearance of the chest wall shows skin tumor which was diagnosed as superficial basal cell carcinoma.

を認めた。また下大静脈・左腎静脈造影では腫瘍血栓はなかった。胸部断層撮影では、背面 7~12 cm の左葉上舌区 S4 に 2×2 cm の孤立性の円形腫瘤陰影を認め (Fig. 2A), 腎腫瘍の肺転移と考えられた。前胸部に隆起性皮膚病変を認め、本学皮膚科を受診し表在性基底細胞癌と診断された (Fig. 3)。

以上の検査結果から、左腎細胞癌 Robson stage IVB, TNM 分類 T3N0M1 および前胸部の表在性基底細胞癌と診断し、10月11日に左腎動脈塞栓術を行い3日後に手術を行った。高齢であることや肺転移のあることなどから経腰的に後腹膜腔に到達した。最初に腎動静脈を結紮・切断し、周囲脂肪組織をつけたまま剝離し左腎を摘出した。リンパ節の腫大はなかったため郭清は行わなかった。また腎摘除術後に皮膚腫瘍摘除術を行った。摘除腎は周囲脂肪組織を含め 915 g で、腎はほとんど腫瘍で占拠されていた。病理組織学的には腺癌で、細胞型は淡明細胞亜型, grade 1であった。術後11日目の胸部断層撮影では、術前にあった左肺の孤立性腫瘤陰影はみられず (Fig. 2B), 転移巣の自然消失と考えられた。自然消失後に、再発予防の目的で interferon- α と tegafur を投与して経過を観察しているが14カ月間再発を認めていない。

考 察

腎腫瘍にみられた転移巣の自然退縮症例は1928年に Bumpus¹⁾ が第1例目を報告して以来、欧米では1976年に Freed ら²⁾ が51例、1980年に Fairlamb ら³⁾ が67例を集計しているが、その後も報告例⁴⁻⁸⁾ が続き現在までに83例が報告されている。83例における退縮の時期・診断根拠・転移部位を Table 1 に示した。退縮の時期は腎摘除術後が55例66%と最も多かったが、中には原発巣に対する放射線治療後や無治療でも退縮した例があった。転移巣と病理組織学的に診断された

症例は27例33%にすぎず48例58%はレ線診断であった。退縮した転移部位は肺が75例90%と最も多く、骨・肝転移が退縮した例もあった。

本邦においては、転移巣の自然退縮の定義を腎摘除術の他に化学療法やホルモン療法などの治療をせずに転移巣が退縮したものに限定すれば、1983年に里見⁹⁾はアンケート調査で5例と報告しているが、われわれの調べた限りでは宮川ら¹⁰⁾が報告して以来、自験例を加えてもわずかに6例¹¹⁻¹⁴⁾の報告をみるのみである (Table 2)。この6例のほかにも転移巣が退縮したとの報告¹⁵⁻¹⁸⁾があるが、その治療内容から自然退縮とは考えにくい症例で今回は除外した。全例とも男性で転移巣は肺で、単発が3例、多発が3例であった。腎腫瘍の組織学的細胞型は淡明細胞亜型が5例と最も多く、混合亜型は1例のみであった。転移巣は全例ともレ線検査によって診断され、自験退縮する前に病理組織学的に転移と診断された症例はなかった。退縮は消失が4例、縮小が2例であった。退縮までの期間は自験例の11日が最も短く、最長は8年であった。

DeKernion ら¹⁹⁾は腎腫瘍の自然退縮は原発巣で0.4%、転移巣で0.8%であると報告しているが、実際にこのような症例に遭遇することはきわめて稀である。また、退縮の機序について、Freed ら²⁾は 1) fever 2) infection 3) hormonal influences 4) operative trauma 5) elimination of a carcinogen 6) impaired blood supply to the tumor 7) immunologic responses などを挙げているが実際には不明である。自験例はS状結腸癌と皮膚癌に合併し、術直後に肺転移巣が自然消失したきわめて稀な症例であるが、大きな腫瘍により産生されていた免疫抑制物質が腎摘除術によって低下し、免疫系が活性化され転移巣の消失をきたしたのではないかと推測している。

胸部レ線で異常陰影をみる疾患として腫瘍病変以外に、1) fungal infection 2) mycobacterial infection 3) sarcoidosis 4) Wegener's granulomatosis

5) rheumatoid arthritis 6) vasculitides などがあがあるが、自験例では上記に挙げた疾患とは考えにくく腫瘍性病変と考えられた。内科で原発性肺腫瘍の可能性もあるとの指摘をうけ、術後に精査を予定していた。しかし、術後早期に肺陰影が消失したため、腎細胞癌の肺転移の自然消失と考えられた。なおS状結腸癌と皮膚癌の転移の可能性もあったが、S状結腸癌については

Table 1. 転移巣自然退縮の欧米における報告例

	症例数	%
性別		
男	62	75
女	21	25
年齢		
～29	1	1
30～39	5	6
40～49	10	12
50～59	39	47
60～69	17	20
70～	8	10
不明	3	4
退縮の時期		
Nx後に転移巣出現、その後退縮	8	10
Nx前に転移巣が退縮	5	6
Nx後に転移巣が退縮	55	66
原発巣に放射線療法後、転移巣が退縮	4	5
無治療で転移巣が退縮	3	4
不明	8	10
診断根拠		
病理組織学的に転移巣と診断	27	33
レ線診断にて転移巣と診断	48	58
不明	8	10
転移部位		
肺	75	90
骨	3	4
肝	2	2
腸	1	1
皮膚	1	1
大腿	1	1
計	83	100

Table 2. 腎細胞癌の転移巣自然退縮の本邦報告例

症例	報告者	年度	年齢	性別	左右	腎摘除術	組織学的細胞型	転移巣	診断根拠	退縮	退縮までの期間	予後	生存期間
1	宮川ら	1963	64	男	右	有	淡明細胞亜型	肺多発	レ線	消失	1年6カ月	生存	1年6カ月+
2 ^{#1}	鶴田ら	1983	69	男	右	無	混合亜型	肺多発	レ線	縮小	1年2カ月	癌死	3年7カ月
3	中野ら	1984	57	男	右	有	淡明細胞亜型	肺多発	レ線	消失	8年	生存	8年+
4	吉野ら	1988	56	男	右	有	淡明細胞亜型	肺単発	レ線	消失	17日	生存	1年8カ月+
5 ^{#2}	山下ら	1989	61	男	左	有	淡明細胞亜型	肺単発	レ線	縮小	2カ月	癌死	4年4カ月
6	自験例	1989	76	男	左	有	淡明細胞亜型	肺単発	レ線	消失	11日	生存	1年2カ月+

^{#1}: 無治療 (腎摘除術なし) で1年2カ月後に転移巣の縮小を認めた。2年1カ月後には転移巣は増大しはじめ、3年7カ月後に癌死した。^{#2}: 腎摘除術2カ月後に転移巣の縮小を認めた。9カ月後に新たな肺転移巣が出現し、4年4カ月後に癌死した。

時期的にみて、また皮膚癌については病期的にみて、それらからの転移は否定的であった。

結 語

S状結腸癌と皮膚癌に合併し、術後早期に肺転移巣が自然消失したきわめて稀と思われる腎細胞癌の1例を若干の文献の考察を加え報告した。

本論文の要旨は第127回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) Bumpus HC: The apparent disappearance of pulmonary metastases in a case of hypernephroma following nephrectomy. *J Urol* **20**: 185, 1928
- 2) Freed SZ, Halperin JP and Gordon M: Idiopathic regression of metastases from renal cell carcinoma. *J Urol* **118**: 538-542, 1977
- 3) Fairlamb DJ: Spontaneous regression of metastases of renal cancer. *Cancer* **47**: 2102-2106, 1981
- 4) Doolittle KH: Spontaneous regression of solitary bony metastasis after removal of the primary kidney adenocarcinoma. *J Urol* **116**: 803-804, 1976
- 5) Mohr SJ and Whitesel JA: Spontaneous regression of renal cell carcinoma metastases after preoperative embolization of primary tumor and subsequent nephrectomy. *Urology* **14**: 5-8, 1979
- 6) Barré C, Vérine JL, Régnier J, Énon B, Houssin A, Chaingné P and Soret JY: Spontaneous regression of lung metastases from renal cell cancer. Myth or reality? Report of two cases. *Ann Urol* **20**: 275-279, 1986
- 7) Figuera M, Biosca M, García-Bragado F, Villar M and Magriná G: Spontaneous regression of bilateral hilar lymphadenopathy in renal cell carcinoma. *Eur J Respir Dis* **67**: 133-135, 1985
- 8) Ritchie AWS, Layfield LJ and Dekernion JB: Spontaneous regression of liver metastasis from renal carcinoma. *J Urol* **140**: 596-597, 1988
- 9) 里見佳昭: 腎癌の肺転移. *癌の臨床* **29**: 555-560, 1983
- 10) 宮川光生, 児玉正道: 原発巣摘除により肺転移巣の自然消失を見た副腎腫の1例. *泌尿紀要* **9**: 315-320, 1963
- 11) 鶴田正司, 児玉長久, 山本益也, 荒井六郎, 古瀬清行, 山本 晁, 川崎美栄子: 肺転移巣が自然退縮を示した腎癌の1剖検例. *日癌治* **19**: 928-929, 1984
- 12) Nakano E, Sonoda T, Osafune M and Takaha M: Spontaneous regression of pulmonary metastases after nephrectomy for renal cell carcinoma. *Eur Urol* **10**: 212-213, 1984
- 13) 吉野修司, 和久井守: 術後肺転移像の自然退縮を認めた腎細胞癌の1例. *泌尿紀要* **34**: 2167-2169, 1988
- 14) 山下雄二郎, 有吉朝美, 蓮尾研二, 白日高歩: 肺転移を伴う腎癌の外科的治療成績. *日癌治* **24**: 759-764, 1989
- 15) 丸山 泉, 佐野正博, 吉永道生, 大津 章, 杉本雄三: 肺転移巣の自然治癒をみた腎癌の1例. *関電医学雑誌* **8**: 45-53, 1976
- 16) 前田 勉, 早原信行: 原発巣摘出後に肺転移巣の退縮をみた腎癌の1例. *日癌治* **14**: 884, 1979
- 17) 大見嘉郎, 畑 昌宏, 太田信隆, 鈴木和雄, 田島惇, 藤田公生, 阿曾佳郎: 原発巣摘除後, 骨および肺転移巣の消退をきたした腎癌の1例. *泌尿紀要* **28**: 731-736, 1982
- 18) 渡瀬秀樹, 井上和彦, 佐々木昌一, 渡辺秀輝, 高橋金男, 加藤文英, 上田公介, 大田黒和生: 肺転移巣の消失した腎癌の1例. *日泌尿会誌* **78**: 1862, 1987
- 19) DeKernion JB and Berry D: The diagnosis and treatment of renal cell carcinoma. *Cancer* **45**: 1947-1956, 1980

(Received on January 24, 1990)
(Accepted on February 22, 1990)